超大乱闘に超大爆笑のテンミリクロス？～いろいろ交差しちゃいます～

シューパズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超大乱闘に超大爆笑のテンミリクロス？～いろいろ交差しちゃいます～

【Ｎコード】
Ｎ５４９９Ｉ

【作者名】
シューパズ

【あらすじ】
剣道全国二位という実力を持つ少年、藍沢海斗。ある日、空間がゆがんでできた穴に入って落ちてしまった。そこに居た謎の人物の頼み（？）により、作者が書いたテンミリオンの世界を回って世界を救うという超巨大な運命を背負ってしまう。海斗と、作者が描いてきたテンミリキャラとでくりなすギャグシリアスハチャメチャファンタジー！！

第一話　好奇心は身を滅ぼしまくるんだぜ！（前書き）

どうもシューパズと申すものですハイ
このたびはテンミリオン小説投稿板に投稿された私の小説のクロスオーバー作品となっております
たぶんその小説は読んでない人が大多数だと思います
しかしそんな方でも楽しめるような作品に仕上げたのでよろしくお願いします

第一話　好奇心は身を滅ぼしまくるんだぜ！

ある秋の晴れた空、涼しげな土手に寝転ぶ少年がいた
その容姿は、世間的に言う『かっこいい』とか『イケメン』な感じの整った顔
髪の色は普通の日本人と同じ黒い髪の黒い瞳
背丈は約１６０？ぐらいでおそらく高校生だろう
高校生にしては背が低いけど……まあ作者は中学生だから分かんないけど（爆
なぜ高校生かわかったと言うと、体育着に『私立桜木高等学校』と堂々と書いてあったからである
寝ている横にカバンが置いてあるから帰る途中なのだろう

「はぁ……疲れた……もう死ぬス……」

そう無駄にぼやいた少年……頬に汗が伝い顔も心なしかほてっている
部活の帰りなのだろう、たぶん部活は剣道……竹刀を横に置いているからだ
でも部活の帰りと行ってもそんなに疲れが残るはずもない……それは……

数十分前

「フンフンフン～♪」

かなり気分がいい少年、さっきの部活でもう勝ちに勝ったからである
剣道部では最強と行っても過言ではなく、新人戦でも優勝し全国ニ位という実力の持ち主だ
しかもその剣道部には全国一位もいると言うから驚きだろう
それでも部員全員、しかも先輩にも全勝するのはいつでも気持ちいのだろう

「あ～今日もいい感じだ……あいつだけには何回やっても勝てねぇ……まあいつか勝ってやるけど」

そう言い顔をしかめる
やはり全国一位には勝てないらしい
そういえば言ってなかったけどこの少年は藍沢海斗（あいざわかいと）といらしい
うぅん……なんとも言えない……

海斗は結構勘が無駄に強かったが次の出来事は予期できなかった……

「ん……ギヤァァァァァァァァ！！！犬ゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！」

海斗は無駄に犬が苦手だった
幼稚園の頃、犬三十匹にほぼリンチ状態で噛まれたことが原因らしい
後ろから小さい小型犬がキャンキャン鳴きながら寄ってくるのだ

おそらく犬の方は人に慣れていて甘えようとしてくるのだろう
しかし海斗にそんなことは関係ない！
海斗には犬が恐怖の塊でしかないので必死に逃げる
それが原因だったのだ

「犬……怖いな……死ぬだろあれ」

とぼやく
それほど怖いのか言葉が震えている
死ぬことはないけど幼稚園でリンチって……なにがあったんだって
話だけど

だがその後に犬よりも恐ろしく信じられない事態に長らく対面する
ことはまだ知らなかった……

「え？」

次の瞬間、海斗の目の前の空気……空間がゆがんだ
海斗はそれを見間違いかと思い目をこすった
しかしそれは消えるどころがどんどん大きくなっていく
それはやがて真中から割れ、穴のようになっていった
中は何も見えず、黒とも白とも言えないいような空間となっていた

「な……なんだあれ？」

海斗はそれが気になり起き上がり近づいた
好奇心と恐怖心が入り混じったような気持でそれを触ろうとした
触ろうとするとどんどん中に入っていく
やはり空間が広がっているのだ
もはや指だけにとどまらず、手、腕、体とどんどん入っていく
それに本人はきずかないままに……

海斗はまだつたっている汗を拭きながら少しづつ歩みだす
また一歩、また一歩と進んでいく
その先に何があるか確かめるために
いつの間にか海斗は完全に中に入ってしまったらしい

その瞬間だった

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

突然、海斗の体は落ちていった
まさに自由落下……てな感じで
悲鳴をあげ落ちて行く海斗の姿は滑稽だった

「何様だぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

何様も殿様もないけど

でもマジでヤバい感じになっている
どこまでもどこまでも落ちて行く
海斗は悟った

（ああ……俺……死ぬのか……）

その思いもむなしくどんどん落ちて行く……

第一話　好奇心は身を滅ぼしまくるんだぜ！（後書き）

まだまだ最初でギャグはあまりなかったです…
しかしどんどん増やしていくつもりです
では次回、海斗君が異世界に行くかもしれません（なげやり
ではでは

第二話　未知との遭遇は意外と近くで起きるもの（前書き）

はいどうもシューパズです
いよいよ海斗君がご対面しますあの方に！
ではどうぞ

第二話　未知との遭遇は意外と近くで起きるもの

「……あれ？俺まだ生きている……」

海斗がいる空間は先ほどと同じ場所
しかし落下は終わり直立している

「おやおや……ようやく来ましたか……」

「おわっ！」

突然海斗の目の前に人が現れた
透き通るような白い髪にきれいに整った顔
瞳は水色に近い色で女性だろう

「ななな何者だ！？」

「私はシューパズ・テラー……まあ平たく言えば世界の創始者です」

全然平たくないような気もするが
海斗の顔は「は？」てな感じになっている

「あ！信じてないでしょ！？たぶん『こいつ何言ってんだ……頭お

かしいんじゃねえの……廃墟で竹でもかじってろネボスケが！！』
とか思ってるんでしょ！！」

「いや……思ってないけど……というかここどこ？」

海斗はかなりとまっどている

「まあここは空間と空間の狭間かんぺ……空間と空間のはざまです」

「今はざまかんぺいって言いかけたよね！！絶対そうだよな！！」

「いちいちうるさいんだよ！廃墟で竹でもかじってろネボスケが！！」

（え～……怒られた……しかも一回しか言ってないし……）

海斗はショックを受けた
それと同時に疑問も起きる
なぜこんなところに自分が来てしまったのか……
しかもあいつ待っていたようなことを……
なぜなんだろう？

「あ～いろいろ疑問に思ってると思うから聞いてね……説明中はお静かにね……
しなかったらお前ののどぼとけ貫くからな……覚悟しといてく

ださいね……」

（怖ッ！！）

そんなことは死んでもされたくないので海斗は黙ることにした
まあそんなことをされたらどちらにしても死ぬけどね

「世界はね……あらゆる数存在する……そのうちのひとつが君が暮らしている世界……
世界は決して交わらない……まったく違う次元にあるからね……
まあ複数の世界に同じ姿の者がいる時もあるけど……それは別人だから気にしないで
私は世界のいくつかを創造している……そして管理している
でも最近世界のバランスが崩されてきている……何らかの原因によって
バランスが崩れてしまうと少しづつ世界が交わり……破滅してしまうんだ
そこで君には世界を救ってもらいたいんだ……わかるかい？
君には世界を救うことができるよきっと……勘だけど
君にはこの私が作り出した最強の一振り“創世者の剣”と世界の力を書きとめる“世界の記録（ワールド・メモリー）”を授けるよ
これで世界を救ってね」

「……」

海斗は唖然としていた

このすべての説明を受け入れきれていなかった
シューパズの方はいそいそと創世者の剣と世界のメモリーを用意し始めた

「これがそうだから受け取ってね」

シューパズは海斗にまず創世者の剣を渡した
それは鞘に収まってはいるが重みと威圧が帯びている威厳あるけんだった
海斗はすぐに気を持ち直して剣を両手で受け取った
重さで少し腕が沈んだがすぐに元に戻す
腰に付けられるようになっておりすぐに海斗はつけた

次に世界の記録を受け取った
それは小さいメモ帳サイズの本になっており中はまだ白紙だった
シューパズによると世界に行けばおのずと記録されていくらしい
海斗はそれは普通に受け取った

「んじゃあバァイ」

「え？」

海斗の下に穴が開いたのだ
重力には逆らえず海斗は無力に落ちて行く
それを見て少し笑うシューパズは悪魔に見えた

「覚えてやがれえええええええええええええええええええええええ
ええ！！！！」

その叫びは辺り一帯に響いた

「頼むよ海斗君……世界の命運は君にかかっているんだ……
…たぶん」

海斗の旅が始まる

第二話　未知との遭遇は意外と近くで起きるもの（後書き）

今回は短かったです
でも次からは本格的に物語が進行します
活躍するのは学園です！！
海斗君がどんな奮闘を見せるのでしょうか？
ではでは

第三話　学園って以外にありがちだよね（前書き）

はいどうもシューパズです
ついに海斗君が旅立ちましたよ
そして記念しべき一回目はあそこです……
その作品が見たい人は下のＵＲＬからいけます
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｓｈｉｆｔｕｐ．ｊｐｎ．ｏｒｇ／ｆｌａｓｈ／ｓｉｍ／ｎｅｗｂｂｓ／ｐａｔｉｏ．ｃｇｉ？ｍｏｄｅ＝ｖｉｅｗ＆ａｍｐ；ｎｏ＝２８５７６
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｓｈｉｆｔｕｐ．ｊｐｎ．ｏｒｇ／ｆｌａｓｈ／ｓｉｍ／ｎｅｗｂｂｓ／ｐａｔｉｏ．ｃｇｉ？ｍｏｄｅ＝ｖｉｅｗ＆ａｍｐ；ｎｏ＝２９８９０
ではお楽しみを

第三話　学園って以外にありがちだよね

「あれ……人が寝ていますね……誰でしょうか？」

「お～いルファなにしてんだ？鼻から牛乳噴き出す練習でもしてるのか？」

「んなわけねえだろこの金髪豚野郎！！……ですよ」

「ルファ妙に酷ッ！」

海斗は倒れていた……見知らぬ学園のグラウンドに
その周りには数人の人が取り囲んでいた
金髪で髪が長い少年
緑と青を混ぜたような微妙な髪の色の少年
血の色のような深紅の長き髪を持つ少年
金色でウェーブのかかった少女
そしてシューパズにそっくりな少年……？

その人たちは口々に話している

「ん……ここどこ？天国？」

おぼろげながらも海斗は起き上がった
目を開けてあたりを見回すと変な髪の色をした人がいて驚いた
しかもその中には先ほどのシューパズそっくりな人までいるから

「あ！お前！」

「え？」

海斗は今にもシューパズそっくりな人につかみかかろうとした
しかしそれは微妙な髪の色の少年によって止められた

「なんだなんだ……お前どうしてルファにつかみかかろうとした？」

「え？ルファ……シューパズじゃなくて？」

海斗は戸惑った
今目の前にしているのがシューパズじゃないとわかったから……
しかし見た目もそっくりなのだが……

「お前……シューパズを知っているのか？」

「ああ、そうだけど……」

「シューパズはこの世界の創造者……作者だ」

「えええええええええええ！！」

海斗はものすごい声を上げた

「それにしても怪しいですね……私が縄に縛って差し上げましょう」

「へ？」

そう言うと金色の髪の少女はどこからか縄を出した
それで海斗をあっという間に縛り上げてしまった
腕も足も完全に

「では聞きますけど……彼方は何者ですが？嘘をついたら針千本彼方の体中に刺した後熱します」

「怖ッ！相変わらずテミは厳しいな」

「ブロントさん、彼方から処刑しますよ」

「すいませんでした……」

どうやら金髪の少年はブロント
金色の髪の少女はテミというらしい
何故かテミの方に深紅の髪の少年が寄り添っていく
それを軽くテミは殴り飛ばす

「俺は藍沢海斗……高校一年生……文句ある？」

「アイザワカイト？珍しい名前だな……イッツァビューティフォー！！」

「ブロントふざけるなよ！！」

微妙な髪の少年がつっこむ

「あと微妙の髪ってやめてくれない！？」

「誰に話してるんだよブルース」

この微妙な髪の少年はブルースというらしい
あと名前が判明してないのが深紅の髪の少年だ
はやく出せよ名前

「それでなんでこの世界に来たんですか？」

「それはシューパズから言われて世界を救えって……」

「シューパズが言っていましたか……本当にウザいですからねあのくそ作者……私の分身だけど」

軽く衝撃事実をカミングアウトしたルファ
海斗はまだ不信感を持っているらしい

目つきを緩めずにらんだように見ている
おおこわ

「私はあきらめませんよテミ様！可憐な彼方のじ……」

深紅の髪の少年はまたテミに殴り飛ばされる
なんなのだろうか？

「まったく……まあいいでしょう……彼方は無罪放免で釈放します」

縄を緩めた
海斗はすぐに振りほどき立つ
しかしまだ警戒心は解けていない
創造者の剣を構えて戦闘態勢を整える

「お前ら何者なんだよ！？ここどこなんだよ！？」

「質問が多いですね……まあとりあえずここがどこか教えて差し上げましょう！！ここは……」

「テンミリ学園です！！」

第三話　学園って以外にありがちだよね（後書き）

終わりましたけどどうでしたか？
早くもテンミリキャラと接触しました海斗君
まだまだ警戒心が解けていなくてどうなることやら……
結局深紅の髪の少年の名前はわかりませんでしたが例の小説を見ていればだれでもわかります
では次回、海斗君がテンミリ学園に入学！？
お楽しみに

第四話　転校生はいつの間にかクラスになじんでいる（前書き）

どうもシューパズです
ついに海斗君がテンミリ学園にッ！
ではどうぞ

第四話　転校生はいつの間にかクラスになじんでいる

「紹介します、転校生の藍沢海斗君です」

１－Ａの教室で今、海斗が紹介されている

黒板に名前も大きく書かれている……しかも誤字

まあ仕方ないと言えば仕方ないのだが……この世界ってほぼ外人名だし

こうなったのは数時間前にさかのぼる…………

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――

「テンミリ学園？」

「ああそうだよここでは魔法やら武術とかいろんなアレが教えられるんだよ」

「魔法？」

海斗はものすごく困惑した

こいつら何言ってんの？的な感じなことを思っていた

「知らないのかよ……まあ別世界から来たのならば仕方がないと言ってもいいか……」

「大丈夫だ！俺だって魔法の“ね”の字も勉強したくないし」

「ブロントさん、“ね”はありません。死んでください」

「テミ酷ッ！」

なぜかもめてしまう人たち

「まあそれにしても彼方はこの学校の制服を着ているんですけど……」

「え？」

海斗は自分の姿をよく見た
それはさっきまで着ていた体育着ではなく、テンミリ学園の制服だった
なぜその恰好をしているのか分からず海斗の頭に？マークが浮かぶ

「なんで？俺さっきまで体育着を……」

「お～い、やっと見つけたよ」

遠くから声がした
こっちに来る怪しい影……悪魔のような姿……さながらガーゴイル

「あれなんだ！？」

「副校長じゃないですか……あいつの喉元に短剣をえぐるようにさ……」

「怖ッそれ以上やるな！！」

そう飛んできたのはガーゴイルでおなじみ副校長
学園なのに副校長というのは言わない約束☆

「海斗君だね？早くしてもらわないと困るよ！」

「え？え？」

海斗は副校長に後からつかまれた
海斗は抵抗したが副校長の無駄に強い握力の前では無力
副校長は海斗を持ちとんだ

そう校舎の方へ……

その後なんやかんやで転校した（適当

（まじなんなんだよ……髪の色変だし……）

海斗はまじで困惑していた
もう訳がわかんなかった

クラスはもう騒がしい

―何あの名前？

―アイザワカイト？

―知らんわぁ～

―あだ名は怪盗でいくかな

やらなんやら話し声が聞こえる

紹介が終わって海斗は席に案内される
一番後ろの席で、隣にいるのはなんとルファそっくりな少年だった
海斗は席に座ってそのことを思い切って言ってみた

「お前さ……ルファってやつにそっくりだな……」
「そりゃそうだよ……俺の兄貴なんだからよ……」
「まじで！？だからにてんだ……双子？」
「双子じゃない、まあ兄貴と姉貴は双子だけどな」
「そうなんだ……自己紹介が遅れたな、俺は藍沢海斗よろしくな」
「俺はルイン・ティクトだ」

二人はとりあえず握手をした
海斗はまぁまぁやっていけそうだと思った
ルインも意外にいいやつだし……

「では起立、礼、ありがとうございました」

クラス全員であいさつ後、それぞれ自由時間になった
海斗の机にはやはりクラスのみんなが集まる
転校生の宿命といえる

「海斗君ってなんで苗字と名前が逆なの？」
「別に、日本人だし」

「何が得意？」

「剣道」

「どこから来たの？」

「日本」

質問攻めを受けている
まあ当然だけど

その隣の席のルインが少し震えた
なんかやばい雰囲気が……

「てめーら、うるせぇんだよ！！消えろ！！」

ルインのどなり声によってクラスがシーンとなった

「相変わらず空気読めないね破滅の女神」

その中で一人だけ口を開いた男がいた
紫色の髪で短髪より少し長い感じ
目つきは柔らかで甘いマスクを持った少年だった

「貴様まだ言うか！」

「まぁまぁ落ち着けって……ああそうそう自己紹介が遅れたね俺はラルス・ラゼンダー、よろしくな怪盗クン」

「は？怪盗？」

海斗は少しキレ気味になった
いきなりあったばかりの奴に意味のわからないあだ名をつけられたから

「海斗、こいつは人にあだ名をつけるからな……しかもいらつく」

「そう言うことか……てかなんで怪盗？」

「いや“かいと”と“かいとう”って似てね？」

「「似てない」」

ルインと海斗の声が被った

その時だった、ラルスの後ろから炎に燃える爪で攻撃しようとした者が居た
ラルスはゆらっとよけたため幸い当たらなかったが、床にあたって床が熔けた

「誰だよお前！？」

「まったく危ないなぁアイーン君は……」

「貴様ァァァァァァァ！！アイーンと呼ぶな僕はアインだ！！」

「同じような物じゃん」

「違うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

アインと呼ばれた少年はなおも爪で攻撃し続ける
ラルスは普通によけて行く

クラスの生徒は危ないから逃げて行く
先生もいないため、教室には海斗とルインとラルスとアインのみになった

「あの二人は困ったものだ……」

「いつもあんな感じなのか？」

「ああ……」

「消えろ！！エレメント解放ミステリー・オブ・ミステリー、さらに幻影分身！」

アインの姿はゆがみ、元に戻ったころには五人になっていた

「これでお終いだ、インフェルノ・キャノン×5！！！」

五人のアインは炎の爪を付けている左手を前に出した
そこから火球が発生し始める
あれが発射されたら大変だ

「発射ァァァァァァ！！」

「Ｔｈｅｙ　ａｒｅ　ｆｒｅｅｚｅ」

ルインが言った瞬間、火球は凍りつき破壊された
ラルスとアインの足も凍りついた

「お前らいい加減にしろよ……殺すぞてめぇら」

ルインの背後からは黒いオーラが出ていたので二人は何も言わなかった

海斗は唖然としていた……こんなことがあるなんて
魔法を初めて見た海斗は驚くのも無理はない

その後、ラルスとアインが説教を受けたのは言うまでもない

第四話　転校生はいつの間にかクラスになじんでいる（後書き）

はい終わりましたけどどうでしたか？
海斗君全然活躍なし（爆
でもこれからガンガン活躍するので見ていてください
ではでは

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5499i/

超大乱闘に超大爆笑のテンミリクロス？〜いろいろ交差しちゃいます〜

2010年10月21日23時52分発行